

【アゼルバイジャン経済トピック 79 号】

在アゼルバイジャン日本大使館

2022 年 2 月 25 日

アゼルバイジャンにおける水関連事業

肥沃な土地と多様な気候帯に恵まれたアゼルバイジャンでは、古くから様々な農作物の生産が行われています。しかし、農作物の多くが旧ソ連時代に開拓された農地で生産されており、灌漑施設の老朽化や塩害のため、農業用水の不足が深刻な問題となっています。

当館は草の根無償資金協力の一環でアゼルバイジャン各地の小規模灌漑施設補修工事を行い、こうした課題の解決に協力してきました。アゼルバイジャン政府もまた、当国最大河川であるキュル川沿いの大規模灌漑施設を改修・新設することで農業用水を確保しようとしています。土を掘っただけの水路も数多く残され、水路のコンクリート護岸化や取水量の増加に伴う将来的なキュル川流量低下への対応等、水資源の効率的な利用促進もまた課題の一つです。

一方で環境天然資源省はカスピ海の海水資源の有効活用のため、淡水化施設の建設計画を掲げています。サルヤン県で稼働する淡水化プラントは、2013 年に淡水化事業のパイロット事業として建設されました。同施設が一日で作る淡水は最大 2,000 リットルで、作られた淡水は、農産物への散水及び同施設内の生活用水として活用されています。

2020 年 7 月 27 日付け大統領令によって承認された「水資源の有効活用に関する追加措置」で設定されたアクションプランにおいても、カスピ海の海水利用検討が含まれ、アブシェロン半島等において淡水化施設の建設に向けた動きがあります。

(以上)